

鳥羽志摩記者クラブ
加盟報道機関 各位

令和6年6月13日（木）

【照会先】

鳥羽市観光商工課観光係 担当：中村

TEL 0599-25-1157

国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）との合同記者発表 「鳥羽市海のレッドデータブック 2023～鳥羽市の絶滅のおそれのある野生生物～」の データベース化について

このたび、「鳥羽市海のレッドデータブック 2023」のデータベース化にあたり、以下の日程で鳥羽市と国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）による合同記者発表を行います。

市レベルで海洋生物の絶滅危惧情報をとりまとめた上で、書籍出版からデータ公開まで一連の活動は、全国的にみても極めて先進的な取り組みになりますので、ぜひ取材していただきますようお願いいたします。

日時：令和6年6月20日（木） 11：00～11：30

場所：鳥羽市役所本庁舎 2階 市長室

内容：①市長挨拶

②海のレッドデータブックの制作の経緯と目的

③海のレッドデータブックのデータベース化の説明

④データベース化による今後の期待

⑤質疑応答 など

出席者：市長、観光商工課、農林水産課

国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）※神奈川県、沖縄県から出席

執筆者代表 岩尾豊紀氏、佐藤達也氏 ほか

※詳細につきましては、別紙をご覧ください。

1. 鳥羽市海のレッドデータブックの制作の経緯

鳥羽市は三方を海に、一方を険しい山に囲まれた土地と神島や答志島、菅島、坂手島に代表される様々な離島からなる地域で、市街地や集落と海との距離が非常に近いことが特徴です。また、俯瞰的に見ると、伊勢湾や三河湾といった内海と熊野灘、遠州灘といった外洋が交じり合うところに鳥羽の海があると言えます。鳥羽は海と密接に関わり、海と共に生き、発展してきました。鳥羽の豊かさの象徴や海の豊かさあつてのことであると考えます。

しかし近年、鳥羽の海の環境が変化していると実感しています。藻場が減少傾向にあることやそれに伴い海女の獲物となるアワビなどの資源の減少が心配されています。環境の変化は鳥羽市だけのことではありませんが、その実態を把握していかなければならないと考えました。

そこで、鳥羽市では、専門家の皆様にご協力をいただき、鳥羽市水産研究所が坂手島から小浜町へ移転した令和2年度を契機に海の生物のモニタリング調査を実施しました。そして、3年間の調査期間で得られた調査結果を多くの方々に共有したいと考え、「鳥羽市海のレッドデータブック 2023 ～鳥羽市の絶滅のおそれのある野生生物～」を令和5年8月に発刊いたしました。



2. 鳥羽市海のレッドデータブックの概要

レッドデータブック（Red Date Book：RDB）とは、絶滅のおそれのある野生生物に関する種名、生態、分布、現状、減少要因等の情報を記載した図書です。1966年に主にIUCN（国際自然保護連合）が作成したものに始まり、現在は各国や団体等によって作成されています。

「鳥羽市海のレッドデータブック」では、鳥羽市内において絶滅のおそれのある野生生物を掲載した冊子として発刊し、鳥羽市沿岸や流入河川およびその周辺の集水域となる一部の内陸において、海辺に生息する脊椎動物18種（海棲哺乳類、鳥類、爬虫類）、魚類30種、甲殻類34種、貝類295種、環形動物および、その他の無脊椎動物群21種、海藻海草類21種、合計419種を調査・評価対象としました。なお、藻場や沖合に生息する種などについても評価、掲載しています。

また、調査海域は、鳥羽市の神島、答志島、菅島、坂手島の4離島に加えて、伊勢湾口の位置からおおまかに鳥羽市北部（伊勢湾内・鳥羽市北端～加布良古岬）、鳥羽市中部（加布良古岬～石鏡灯台）、鳥羽市南部（石鏡灯台～鳥羽市南端）としました。

この「鳥羽市海のレッドデータブック」は単に不安を煽るものや掲載種の水産物の漁獲をセーブすることを訴えるものではありません。今後変わりゆく自然環境と共存していく上で、鳥羽市の海の現状を把握し、未来へ向けた貴重な基礎資料として活用していくことを目的としています。「鳥羽市海のレッドデータブック」を通じて、海洋生物の保全の役割を果たすとともに、水産振興、また、観光分野におけるエコツーリズムや教育現場など、幅広い分野で活用されることを期待しています。

3. データベース化とは

今回発表させていただく「データベース化」とは、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC ※1）で構築し、その沖縄拠点である国際海洋環境情報センター（GODAC）で運用しているデータベースシステム（BISMaL ※2）への公開のことを指します。また、このデータは BISMaL を経由して国連のユネスコ傘下にある海洋生物多様性情報システム（OBIS ※3）にも登録されます。つまり「鳥羽市 海のレッドデータブック」のデータが、OBIS と BISMaL を通して世界中から閲覧できるようになります。

本データベース化により、豊かな自然環境と、多様な生き物たちが生息する海とともに観光や漁業が主幹産業として行われていることを示す情報を公表することとなり、鳥羽の海の生物の状況が容易に可視化できるだけでなく、世界中の研究者がデータにアクセスし、他地域と比較するなどの利活用ができるようになります。また、BISMaL をプラットフォームとする鳥羽市独自のデータベースが構築されたことにより、今後のモニタリング結果の追加や情報修正が安定的に実施できる環境が整備されたことを意味します。

行政が主体的に取り組む上では、本データベースが海洋教育や研究等を通じて、市民や地元の漁業者等に経済的に還元されることが究極的な目標となります。そのため、今後はデータベースの公開にとどまらず、その有意義な利活用に向けた取り組みが必要になると考えられます。

市レベルで海洋生物の絶滅危惧情報を取りまとめた上で、書籍出版からデータ公開まで一連の活動は、全国的にみても極めて先進的な取り組みといえることから、このたび、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）との合同発表を行う運びとなりました。

※1 国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）の Web ページ

<https://www.jamstec.go.jp/j/index.html>

※2 BISMaL の Web ページ <https://www.godac.jamstec.go.jp/bismal/j/>

※3 OBIS の Web ページ <https://obis.org/>

4. データベース化による今後の期待（一例）

- ・海の研究地域としてのブランディング（既存研究活動のプロモーション）
- ・多様な研究主体が集まる地域づくり支援（地域内外の学術研究機関等とのマッチング）
- ・世界に通用する海洋人材の育成（海洋教育の推進、国際交流等の外国とのつながりづくり）
- ・豊かな海や取り巻く文化の保護と活用（海洋環境のモニタリング、海にまつわる食・文化の継承・海洋保護区の管理）
- ・海を活かした持続可能な産業振興（水産物の高付加価値化、新しい観光の推進）



“海のシリコンバレー”としての鳥羽市（伊勢志摩地域）のさらなる深化（価値の向上）

「誰もがキラめく 海のめぐみがつなぐ鳥羽」の実現

5. その他

令和 6 年 9 月開催 SPNHC-TDWG2024（沖縄国際大会）での発表を予定

※SPNHC（Society for the Preservation of Natural History Collections）国際自然史標本保全学会

※TDWG（Biodiversity Information Standards）生物多様性情報標準化委員会